

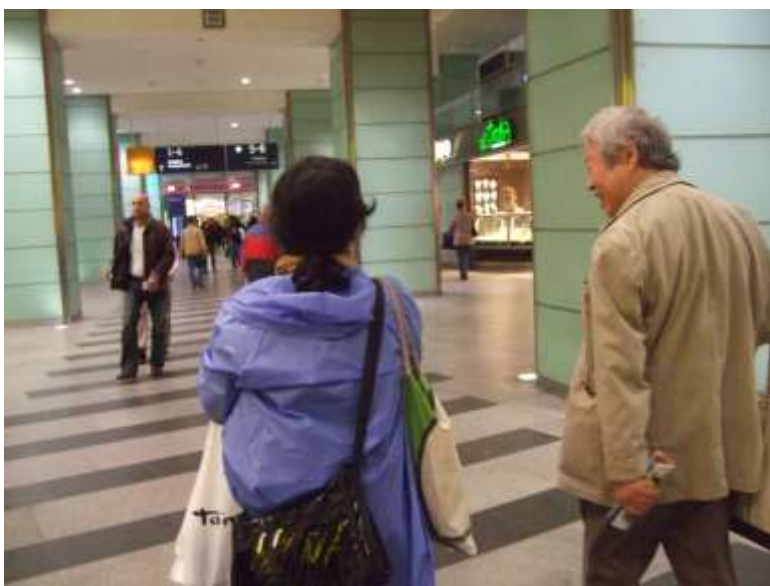
ベルリン 1日目-2

立花先生と「冷戦」の記憶

まずはホテルにチェックイン。
先生は荷物を置いたらすぐに街を回りたいとのことで、
私はホテルのロビーで待機。

キャンパス地のトートバックに、なにやらいろいろ詰め込んで、エレベーターから降りてきた先生。

まずは、ブランデンブルク門から東側に続く通りを歩きたいとご所望。
つまり、ウンター・デン・リンデン通り、ドイツのメインストリート。
ホテルの最寄りであるフリードリッヒシュトラッセ駅を通り抜ければ、徒歩ですぐの場所である。森鷗外の舞姫にもでてきたベルリンの名所だ。



旧東側、フリードリッヒシュトラッセ駅構内にて saita (c)

この通りにはドイツの歴史が詰まっている。ナチスの爪痕もたくさんある。
例えば、1933年5月10日にナチスが反体制と判断した書物を大量に焚書したバーベル広場¹。広場の真ん中には、ここに入るはずだった20,000冊の本が焼かれたという意味が込められた「沈められた書庫 (versunkene Bibliothek)」というモニュメントがある。ガラスの中をのぞき込むと地下に空の本棚が並ぶ。だから道行く人はみな地面を覗き込んでいる。

¹ この広場の名称はいろいろある。オペラ座の隣にあるのでオペラ座前広場 (オペルン広場—Opernplatz 一) といわれることもある。1910-1947にはフランツ・ヨーゼフ皇帝広場という名前であった。



「それは前触れに過ぎなかった、本を焼き払う処では、最後には人間をも焼いてしまうのだ」
ドイツを代表する文筆家、ハインリッヒ・ハイネの言葉が刻まれている。ハイネはドイツに起きることを予
言していたのだろうか……ハイネもユダヤの出自であり、その著書も焚書の対象であった。

写真 saita (c)

そしてノイエワッハ（新衛兵所）。現在は戦争と暴力支配の犠牲者を追悼する記念施設である。東ドイツ時代はファシズムと軍国主義の犠牲者を弔う施設で、内部に犠牲者を悼む炎が灯されていた。つまり統一によって、国が「弔う」対象は「変化」したのだ。そのため、ノイエワッハは、国の変化と歴史観の変化が呼応した象徴といえよう。



saita (c)

ノイエワッハ(新衛兵所)内に 1993 年から設置されているケーテ・コルビッツ作「死んだ息子を抱く母(Mutter mit totem Sohn)」。ノイエワッハは大戦でほぼ壊滅したが、東ドイツ時代にファシズムと軍国主義の犠牲者を追悼した記念施設として再建、1993 年以降はこのピエタ像が設置され、ナチズム、および全体主義の暴力支配の犠牲者を含めて弔う意味がこめられた。

ところが、先生、どこをご案内してもなにか釈然としない様子。
焚書のモニュメントをみせても、横のオペラ座のほうが気になって
「確かここに高級官僚専用の別の入り口があって……」
とか、
ノイエワッハをご説明しても
「昔はここで衛兵交代が行われていたよね」
と、期待していたのと違う反応が……。

なにやら私の案内と先生の興味がかみ合わない、先生もそう感じたのだろうか。左手にフンボルト大学、旧博物館、そしてその先のベルリン大聖堂まで進んだ時点で、「ちょっとそこに腰かけて」と、私は先生と聖堂前の階段で横に並んで座るように誘われた。



ベルリン大聖堂

先生はベルリンの街並みを眺め、ガイドブックを広げると、東ドイツで見た風景を語りだした。

噴水があって、その周りで子どもたちが遊んでいた。

あれはいったいどこだったのだろうか。

この先にそのまま進んで、そういうものがあるそうか。

ぱっと思いつくのは、すでに取り壊された旧東ドイツの国会議事堂、共和国宮殿のあたり。東ドイツの崩壊とともに機能を失った建物だ。だが、その地下には市民の娯楽施設があり、旧東ベルリンに住んでいた人々には「古き良き時代」を思い出させる施設だった。全面、

黄色か赤か金かはっきりしない微妙な鈍い色を放ってピカピカ光っていた。アスベスト問題で何年も放置され、やっと最近解体、跡地は、かつてそこにあった宮殿の再建が目指されている。しかし、解体費用の工面でこれだけでこずったのだから、いつ宮殿が姿を現すかなんてまったく予想がたたないといっている。

しかし、あの廃墟の前に噴水があっただろうか、正直私も定かではない。



共和国宮殿(2004年 佐野撮影)。当時、中国兵馬俑展が行われていた。もう手入れされることがない曇ったガラス窓を通して見えたテレビ塔が東ドイツのかつての興隆を物語るようで印象的であった。

とにかくそのまま奥に進むことに。

左側にはシュプレー川とペルガモンミュージアムなどが並ぶ博物館島、そして川沿いには旧東ドイツ時代の生活の様子が垣間みれる DDR 博物館。だんだん旧東側の色合いが強くなっていく。

と同時に、ここは来るたびに新しいスポットができていく部分でもある。東ベルリンの信号のマークを模したアンペルマンを用いたグッズを扱うショップも入っている。

そう、ウンター・デン・リンデンはドイツの歴史だけでなく、ベルリンの変化も凝縮して現れる場所なのだ。



旧東ドイツ地域で見られる信号マーク、通称「アンペルマン」。統一後、西側の形態となり廃止されることが惜しまれ、一部地域で残ることになった。

とうとう終点のアレクサンダープラッツに近いテレビ塔前の広場まで来た時に、先生はなにかをみつけたように足を速めていった。



テレビ塔: 1992 年最初にベルリンにきたとき、「いつでも見張っているぞ、と示すために、テレビ塔は西ベルリンのどこからでも見えるようになっているんだ」とドイツ人から冗談っぽく説明を受けた。確かにテレビ塔はベルリンのどこからでも見える。

その行き先には噴水がある。

噴水の様子を探るように脇をまわりながら、先生は奥の赤の市庁舎の前で足を止めた。



先生が足をとめた噴水

先生の記憶にあったのは。このネプチューンの噴水だった。

この広場はね、「社会主義圏のよきところ」ってあったじゃない、みんな平等っていうね、ここには全体的にそんな雰囲気があったわけ。

(少し変わってしまったみたいだけれど) この場所に、こういう感じの噴水があって、感じがすごく残っている



2004年に撮影した広場の写真。奥に共和国宮殿がまだ残っている sano(c)

先生は記憶がピタッとはまってよみがえったよう。なんだかうれしそうでした。



saita(c) ビデオより

安心されたのか

どこかにいって、なんか食おう。腹減ったね。

と、にやっとされる。

いうわけで、もう少し先まで進みアレクサンダープラッツ駅に出ることに。



saita(c)

アレクサンダープラッツのシンボルともいえる世界時計

そして食事



saita(c)

ベルリン 1 日目は満足された様子の先生。

翌日、私は自分の研究調査がある。近郊電車でベルリンから 2 時間ほどかかるシュベリー
ンという場所でインタビューの予定が入っているのだ。

そのため、先生の行きたい場所を伺って、地図や計画を確認し、斎田君と 2 人でも動けるよ
うに情報をまとめておく必要がある。

先生、明日はどこに行きたいですか？

知らないスポットをリクエストされたらどうしよう、とどきどきしながら私が質問すると

ここにいきますか？

と先生が開いた本のページには……
ホーネッカーの山荘???

先生はそこにある核シェルターがみたいという。
先生がいうには、
プラハでもそういうものを見てきた、
日本は核爆弾を落とされたのでそれほどではなかったが、
冷戦時代は、いつ核戦争が起きてもおかしくないと思っていた
その脅威が、こういうものをみているとよくわかる、と。



プラハの核シェルター跡(The Nuclear Bunker Exposition in Prague)を見学、ガスマスクをかぶ
ってみる先生

核シェルター？

旧西側でひとつみたことはあるが、長いベルリンの歴史をずっと追っている観光客向けの
施設 (Story of Berlin)。核シェルターの見学も目玉のひとつではあるが、展示の一部にす
ぎなかったはず。

そもそも、ホーネッカーの山荘とはいったいどこに？

このときに私は気がつくべきだった。

立花先生がベルリンでみたいのは、
ナチズムや第二次世界大戦の歴史がメインではない。

「冷戦」の歴史だ。

東西分断、とくに分断されていたときの旧東側の様子が伺えるものだ

だいたい日本で打ち合わせした際、ドレスデンにどうしても行きたい、
どう変わったか見てみたい、と主張されていたではないか。
先生は「東ドイツ」にいったことがあるのだ。

その記憶と現在をつなげたいのだ。

「冷戦」の記憶と、いまのベルリン、ドイツ、そして旧東欧諸国の姿を。

だが、私はホーネッカーの山荘の場所をどうやって調べようか、で頭がいっぱいで、
そこまで気を回すことはできなかった。